

私が諸教派の活動に
参加できない理由

ウイリアム・トリュー著



伝道出版社

私が諸教派の活動に
参加できない理由

ウィリアム・トリュー著

**MY REASONS
FOR NOT BEING FREE
TO ENGAGE IN
INTER-DENOMINATIONAL
SERVICE**

By William Trew

Publisher
Evangelical Publishers
Tokyo, Japan

はじめに

著者 ウィリアム・トリュー兄は、長年にわたって神に仕え、実り多い働きを忠実になさった後、一九七一年八月六日、主のみもとに召されました。

私が専心の働き人に推薦された集会でこのメッセージを聞けたことは光榮でしたし、聖靈はそのメッセージを用いて、この件に関する私の確信をさらに明確なものとしてくださったのです。

ご兄弟が召されて以来、私はこの小冊子が再版されることを心から願つてきました。その内容が、集会の交わりのうちにあるすべての信者にとって非常に重要であると確信したからです。

特に、世界教会主義（エキュメニカリズム）へと傾きつつある今日、すべての信者が私たちと意見を共にされ、同じ確信を持たれるようになることが私の切なる祈りです。

ジェームズ・D・マッコール

まえがき

これから書き記すことは、スコットランドで学ばせていただいたものと同じ内容です。その学びのことを聞かれた多くの方々の再三の要望にお応えし、ここに出版の運びとなりました。この小冊子が用いられ、この件について導きを求めている多くの兄弟姉妹たちの助けとなるようとの切なる願いをもって。

著者が「私」という一人称代名詞を何度も用いているのをお許しください。個人的な確信として述べたほうが賢明だと思うからです。

これは、「集会」に属している信者の皆さんに対してもう一度お詫びを述べます（皆さんには、神のみこころについて教えられたところに従つて「集会」という立場を受け入れた方々です）。言い換えれば、皆さんのがおとりになつた立場と一致した行動をおとりになるよう懇願するものです。

本書が用いられ、兄弟姉妹たちを「主のまっすぐな道」（使徒一三・10）に進ませたとすれば、主に栄光が帰され、著者も満足する次第です。

私が諸教派の活動に参加できない理由

私が主に仕え始めてから、もうかれこれ三十年になろうとしています。その間、英國の各地を訪れ、多くの集会（assembly）と交わりを持つようになり、それらの動向を見守つてきました。その変化に注目し、多くの集会が集会としての特質を失っていくのを見てきました。今日では、世的な事柄が驚くほど諸集会に侵入し、概して若い人たちの靈的成長が欠如しています。その原因を分析しようと努めた結果、私は次のことをますます確信するに至りました。すなわち、そのおもな原因の一つが教派連合主義という近代的精神にあるということを。それは「寛容な心」と「愛」という装いをして訴えてきます。実際、この主義を唱える人たちの多くは、「同じ信仰を持つ他の信者たちを愛するがゆえに、超教派の活動をするのだ」という口実のもとにそれを行っています。しかし、ヨハネの手紙第一の五章二節からはつきりわかるとおり、「同じ信仰を持つ他の信者たちを愛すること」は、私たちが神の命令に従うことによって示されるのです。もし、同じ信仰を持つ他の聖徒たちを本当に愛しているならば、彼らを促して神の道に歩ませたいと願うことでしょう。そうする

ことだけが、彼らに豊かな祝福と眞の幸福をもたらすことを知っているからです。しかし、彼らがそのように歩むよう、影響を与えることができるのは、その人自身が他人の模範となれるほどまでに神の命令に従順に歩んでいるときだけです。妥協して神の真理を曲げることが「愛の証拠」であるはずがありません。

私は最近、いくつかの地域集会で続けて奉仕をしていますが、それらの集会は靈的に貧しく、大いに悲しむべき状態です。それが、何年にもわたって諸教派の活動に携わった結果であるということは否定できません。私はそれが起こるべくして起こったことのように思えるのです。教派の活動に参加しながら、神の集会を堅固な基礎の上に建て上げることなど、絶対に不可能だからです。私たちはそれが証明されるのを何度も見てきました。

自分の心に、ある一つの質問を投げかけ、神の御前でその答えを決定するということが、靈的な経験とクリスチヤンの奉仕における基本です。その質問を発することは簡単です。しかし、私たちの歩みと奉仕が全体としてどのようなものになるかが、その答えにかかっているのです。その質問とは次のようなものです。「私の歩みを導くべきものは何か。私は人生で何をよりどころとすべきなのか」。私は、ずっと前に、神のみことば以外に私を導くものがあつてはならないという結論に達しました。モウル兄は、「今日（集会以外の『教会』で）使われている『牧師職』ということばと、新約聖書の『監督職』（I テモテ三・1）には共通するものは何もない」と述べています。それゆえ

私たちは次のように尋ねるのです。「では、今日使われている意味での牧師職の権威はどこから来るのだろうか」。その答えは、「今日あるような牧師職は、実際には、二世紀の終わり頃、あらゆる教会で出現したものである」ということです。そのため、教会の歴史が、靈感された聖書の権威を合法的に無視しているように思えるでしょう。しかし、そのような立場をとることは私にはできません。私は、「私の歩みを導くにあたって唯一権威あるもの」として神のみことばを受け取るので

す。

「神が私たちの奉仕を目に見える形で祝福しておられるとしたら、それこそ、神がその奉仕を認めておられる確かな証拠だ」と主張する人々がいます。しかし、はたして本当にそうでしょうか。私のある友人は「女性の伝道者」です。彼女は、神のみことばが自分の取る方針や引き受けている職務をとがめているという事実に何度も直面しましたが、自分のメッセージを聞いて多くの男女が救われてきたことを理由に、自分の不従順を正当化しています。目に見える形で祝福が与えられてくるからといって、それが必ずしも、神が私たちの道を認めておられる証拠にはなりませんし、そのことは聖書からも明らかです。神のみことばこそが、あらゆる問題を解決し、すべての歩みを支配し、小さな奉仕をも導き、私たちがかわり合いを持つべき相手をも決定すべきなのです。私たちは心からそう願っているでしょうか。これらの質問に対する答えが、私が述べていることの基礎となるのです。

私は、マタイの福音書二八章一六一一〇節で主がお命じになつてゐることによつて、個人的にこの問題の回答を得ることができました。この箇所には「いつさいの」、「あらゆる」、「すべての」（英語ではすべて「all」）といったことばが出てきます。ですから、キリストのしもべが、ゆだねられた使命を果たすのに必要な条件をすべて満たさなければならないのは当然のことです。

マタイの福音書二八章一六一一〇節

しかし、十一人の弟子たちは、ガリラヤに行つて、イエスの指示された山に登つた。そして、イエスにお会いしたとき、彼らは礼拝した。しかし、ある者は疑つた。イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。「わたしには天においても、地においても、いつさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行つて、あらゆる国の人々を弟子としなさい。そして、父、子、聖靈の御名によってバプテスマを受け、また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを行つて、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます」。

一、私たちの主の主権

「わたしには、……いつさいの権威が与えられています」（18節）。

主は人に拒まれ、殺されましたが、神の右に着座され、「今や主ともキリストともされた」（使徒二・36）お方です。このお方は、天においても、地においても、絶対的な権威を有しておられます。主はその権威をどのように用いるおつもりなのでしょうか。主は、大いなる恵みをもって、あらゆる国の人々を祝福するために、それを用いようとしておられます。ですから、主は、ご自分のしもべたちをご自分の周りに集め、彼らに進軍命令をお与えになつたのです。

二、しもべたちの働きの範囲

「あらゆる国の人々を弟子としなさい」（19節）。

主の恵みは、すべてを凌駕りょうがしたものであるため、狭いイスラエルの国境を飛び越えました。その結果、人間に対する主の祝福のメッセージが諸国に伝えられ、異邦人の間に広められています。その目的は何でしょうか。罪人が地獄から救われることでしょうか。そう、「そのとおり」です。しかし、そのことだけが、ここで主が言われたことではありません。

「弟子としなさい」というのが主の命令です。ここで主は次のことを思い描いておられたのです（そして、そのことは、諸国に福音を伝えるときに、主のしもべたちも心しなければならないこと